

SAKATA Tomoki × TAKAGI Ryoma

V S

Recital Series

Vol. 5

2022.11.10[木] 19:00 開演
東京芸術劇場コンサートホール

阪田知樹 (ピアノ)
SAKATA Tomoki, Piano

高木竜馬 (ピアノ)
TAKAGI Ryoma, Piano

Program

タールベルク:『2つのノクターン』作品 35 より
第1番《大夜想曲》嬰へ長調

Sigismund Thalberg:
Deux Nocturnes, Op.35 - No.1 Grand nocturne

阪田 Solo

リスト:『愛の夢』S.541/R.211 より
第3番《夜想曲》変イ長調

Franz Liszt:
Liebestraume, S.541/R.211 - No.3 Nocturne in A-Flat Major

高木 Solo

タールベルク:ロッシェニの歌劇『エジプトのモーゼ』
の主題による幻想曲 作品 33

Sigismund Thalberg:
Grande fantaisie sur "Mose in Egitto", Op.33

高木 Solo

リスト:ベッリーニの歌劇『ノルマ』の回想
S.394/R.133

Franz Liszt:
Bellini - Réminiscences de "Norma", S.394/R.133

阪田 Solo

休憩 (20') Intermission

リスト(一部タールベルク、ヘルツ作曲):

ヘクサメロン(演奏会用小品) -

ベッリーニの歌劇『清教徒』の行進曲による
華麗な大変奏曲 S.654ii

Franz Liszt (Thalberg, Herz): Hexaméron -
Grandes Variations de bravoure sur un thème des Puritains
de Bellini pour deux pianos

1st: 高木、2nd: 阪田

リスト:2台ピアノの為の悲愴協奏曲 S.258/R.356

Franz Liszt: Concerto pathétique, S.258/R.356

1st: 阪田、2nd: 高木

Profile

©HIDEKI NAWAMI



阪田知樹 (ピアノ)
SAKATA Tomoki, Piano

2016年フランク・リスト
国際ピアノコンクール
第1位、6つの特別賞。
2021年エリザベート王妃
国際音楽コンクール第4

位入賞。東京芸術大学を経て、ハノーファー音楽演劇大学大学院ソリスト課程に在籍。第14回ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールにて弱冠19歳で最年少入賞。ピティナ・ピアノコンペティション特級グランプリ、聴衆賞等5つの特別賞、クリーヴランド国際ピアノコンクールにてモーツァルト演奏における特別賞、キッシンジャー国際ピアノオリンピックでは日本人初となる第1位及び聴衆賞。国内はもとより、世界各地20カ国で演奏を重ね、国際音楽祭への出演多数。2015年CDデビュー、2020年3月、世界初録音を含む意欲的な編曲作品アルバムをリリース。内外でのテレビ・ラジオ等メディア出演も多い。2017年横浜文化賞文化・芸術奨励賞受賞。

公式ウェブサイト
<https://www.japanarts.co.jp/artist/tomokisakata/>

©光上雅



高木竜馬 (ピアノ)
TAKAGI Ryoma, Piano

2018年9月に第16回
エドヴァルド・グリーグ国際
ピアノコンクールにて、
優勝及び聴衆賞を受賞
し、一躍世界的に脚光

を浴びる。その他にも第26回ローマ国際ピアノコンクールなど、7つの国際コンクールで優勝。その後、小林研一郎氏、尾高忠明氏の指揮により3回に亘って東京フィルハーモニー交響楽団と共演した他、オスロフィルハーモニー管弦楽団との共演、ウィーン楽友協会やエルプフィルハーモニー等でのリサイタルなど、日本とウィーンを拠点に多方面で活躍。NHK総合テレビ『ピアノの森』では、雨宮修平メインピアニスト役で出演し、大好評を博す。その他にもTV『題名のない音楽会』TV『らららクラシック』等々、メディアへの出演多数。故エレーナ・アシュケナージ、故中村絃子、ミハエル・クリスト、ボリス・ペトルジャンスキー、アンナ・マリコヴァの各氏に師事。(公財)江副記念リクルート財団 第35回奨励学生。(株)イープラスとエージェント契約を締結。

公式ウェブサイト
<https://ryomatakagi.com/>

Program notes

高坂はる香 (音楽ライター)

フランツ・リスト(1811～1886)とジギスモント・タールベルク(1812～1871)。二人は同じ時代を生き、サロン文化の花開いたパリで活躍し、いずれも超絶技巧のピアニスト兼作曲家として名を馳せた。

一足先にスターピアニストとして人気を集めていたリストは、自身がパリを離れている間にタールベルクが時の人となっていることを聞きつけると、愛人のマリー・ダグー伯爵夫人と滞在していたスイスから急遽パリに戻り、演奏会を開いて対抗したという。やがて周囲もリスト派とタールベルク派にわかれて論争が起きた。

そして1837年には、クリスティナ・トリヴルツィオ・ベルジョイオーソ侯爵夫人のサロンコンサートで、有名な、リストとタールベルクによる“ピアノ対決”が行われる。高額なチケット代にもかかわらず、多くの聴衆が足を運んだという。これはのちに、当時のピ

アノの鍵盤が象牙でできていることから、“象牙の戦い”と呼ばれた。

この対決後、主催者である夫人が、“タールベルクは世界一のピアニスト、リストは唯一のピアニスト”という言葉を残したことが知られている。そんなさまざまなエピソードから、この世紀のライバル関係は後世まで語りつがれることになった。

本日演奏されるのは、子供の頃からリストを敬愛してやまない阪田知樹さんが、この“ピアノ対決”からインスピレーションを得て選曲したプログラム。友人でもある高木竜馬さんとともに、二人の作曲家による超絶技巧作品、そして、主にリストが手がけた2台ピアノ作品を披露する。

「今回は、リストとタールベルクの生きたロマン派の時代の一瞬を切り取って再現します。聴いたことのない曲もあるかもしれませ

んが、これこそピアノが特別に輝いていた時代の音楽。それを一緒に体験できれば嬉しいです」と阪田さん。19世紀のパリのサロンにタイムスリップする時間となりそうだ。

前半は、ソロによる演奏。リストとタールベルクの手によるノクターンとオペラ編曲作品をそれぞれ交互に聴くことで、「二人の作曲家の違いを感じとってほしい」と阪田さんは話す。

ここからは、プログラミングを担当した阪田さんの言葉を引用しつつ、楽曲について紹介する。

タールベルク

『2つのノクターン』 作品35より

第1番《大夜想曲》嬰へ長調

約7分

タールベルクは、リストから2ヶ月半遅れて、スイスのジュネーヴ近郊の街に生まれた。幼少期のことはあまり知られていないが、母

親が優れたアマチュアピアニストで、最初の音楽の手解きをしたといわれる。その後、イグナーツ・モシェレスはじめ、当時のピアノの大家のもとで学び、1836年、25歳で参加したパリ音楽院のコンサートの自作の演奏が高く評価され、スターピアニストの仲間入りを果たした。

『2つのノクターン』Op.35は、1839年に出版された。

「第1番は、“グランド・ノクターン”などという名前が付けられていますけれど、ノクターンでこういう展開をするのかと感じる、おもしろい作品。きれいな曲ですが音の数もとても多いです。タールベルクの作品は、難しいとはいえ、楽曲の構造もテクニックも古典派により近いといえます」(阪田さん)

リスト

『愛の夢』S.541/R.211より 第3番

《夜想曲》変イ長調

約6分

『愛の夢』は、“3つの夜想曲”の副題を持ち、全3曲からなる。いずれもリストがマリー

ダグー伯爵夫人と恋愛関係にあった30代半ばに書いた歌曲が原曲。甘いメロディで親しまれる第3番は、ドイツの詩人、フェルディナント・フライリヒラートの詩に音楽がつけられた《おお、愛しうる限り愛せ》S.298を原曲とする。

「リストの『愛の夢』第3番もピアノスティックなパッセージが多いですが、たくさんの音の数の使い方には、タールベルクとの違いが感じられます」(阪田さん)

タールベルク

ロッシーニの歌劇『エジプトのモーゼ』の主題による幻想曲 作品 33

約 17分

タールベルクには、^{オペラ}歌劇のトランスクリプションが多くある。この作品は、19世紀に一世を風靡したイタリアの作曲家、ジョアキーノ・ロッシーニ(1792～1868)のオペラから主題をとったもの。『エジプトのモーゼ』は、旧約聖書の出エジプト記を題材とした作品。

「大変な力作で、タールベルク自身がよく演奏していたと伝えられています。他の作品

に見られる“音数が多い”というスタイルが、さらに極められた楽曲です。タールベルクの特徴とされた、真ん中で旋律を弾き、両外側をアルペジオで埋める、“3本の手”というテクニックも現れます」(阪田さん)

タールベルクの評価を高めることになった代表作の一つで、前述の“象牙の戦い”でも演奏された。ちなみにこれに対してリストが演奏したのは、《パチーニの歌劇『ニオペ』の主題による大幻想曲》だった。

リスト

ベッリーニの歌劇『ノルマ』の回想 S.394/R.133

約 17分

リストもまた、流行オペラから主題をとり、超絶技巧を要するトランスクリプションの数々を書き残している。本作は、19世紀前半のベルカント・オペラ全盛期を牽引したヴィンチェンツォ・ベッリーニ(1801～1835)の歌劇『ノルマ』から主題をとった楽曲。オペラは、巫女のノルマが密かにローマ帝国の総督ポリオーネを愛し、2人の息子

を育てる中で巻き起こる悲恋の物語。

オペラでよく知られるのはアリア《清らかな女神よ》だが、この作品ではそのメロディは登場せず、他の合唱曲などのテーマが用いられている。

リストはこの作品を、フランスのピアニーマーカであるプレイエルの社長の妻で、かつてリストと恋愛関係にあったマリー・プレイエルに献呈。彼女のリクエストにより、タールベルク風のパッセージが盛り込まれたといわれる。「前述のタールベルクの“3本の手”のテクニックが取り入れられているので、ご注意ください」(阪田さん)

後半は、主にリストの手による2台ピアノ作品。

阪田さんによれば、「リストがすごかったのは、古典派や初期ロマン派でそれまでにあった超絶技巧のテクニックを吸収した上で、全く違うものを作り出したということ」。そこが、古典派な手法を踏襲し続けたタールベルクとの違いといえるのだそうです。

「特別な存在として歴史に名を残す音楽家には、そういう独創的な部分があるでしょう」(阪田さん)

リスト (一部タールベルク、ヘルツ作曲) ヘクサメロン (演奏会用小品) - ベッリーニの歌劇『清教徒』の行進曲 による華麗な大変奏曲 S.654ii

約 12分

再び、ベッリーニのオペラから主題が取られた作品。1834年に作曲された歌劇『清教徒』は、17世紀の清教徒革命の時代を舞台に、戦乱に翻弄される男女の恋を描いた物語。

主題となっているのは、劇中の《清教徒の行進曲》。リストは1837年、前述のベルジョイオーソ侯爵夫人から、このテーマを使い、当時人気を集めていた5人の友人たち——フレデリック・ショパン、カール・ツェルニー、アンリ・ヘルツ、ヨハン・ペーター・ピクシス、ジギスモント・タールベルクと共同して、変奏曲作品を書かないかと提案された。リストはまず、各作曲家が持ち寄った変奏曲に自

作の序奏やフィナーレを加えるなどして作品をまとめた。その後さらに、コンパクトな形にして2台ピアノ版の編曲をおこなっている。ヘクサメロンとは、旧約聖書における創世の6日間を表す言葉。

「実はこの曲は、前述の“ピアノ対決”の日に披露される予定でしたが、完成が間に合わず、かわりに二人の競演が行われることになりました。今回弾くのは2台ピアノ編曲版。ショパンやツェルニーなどによるいくつかのパートがカットされ、一方で、タールベルクとヘルツの変奏曲は残されています。敵視していたといひながら、リストがタールベルクに対して一定の評価をしていたことが窺えます」(阪田さん)

リスト

2台ピアノのための悲愴協奏曲

S.258/R.356

約19分

リストが、パリ音楽院のコンクールのために手がけ、1851年に出版された《大演奏会

用独奏曲》S.176が元となっている作品。当時のリストは、ワイマールの宮廷楽長に就任し、ヴィルトゥオーゾ・ピアニストとしての活動を控え、作曲と指揮に専念するようになっていた。

「この時期はロ短調ソナタと同じ頃だけに、内容がとても充実している隠れた名曲です。アルゲリッチ&フレイレや、変わったところだとバルトーク&ドホナーニなど、数々の巨匠の録音があります」と阪田さん。

2台ピアノ編曲版が書かれたのは、ソロ版から10年以上後のことだが、出版されると人気を集めた。それもあって、別の人々がピアノ協奏曲に編曲したものをリストが手直した版など、いくつものバージョンが存在する。

楽曲の形式は、そのロ短調ソナタやバラード第2番と似て、ソナタ形式をとりつつ多楽章風になっており、複数の主題が循環する。

重く厚みのあるハーモニーが多用されながら、ロマンティックで華やかな音楽が展開する。二人の奏者がテクニックを発揮することで、ピアニスティックな魅力を存分に味わうことのできる、リストらしい作品。

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場
協賛：スタインウェイ・ジャパン株式会社

発行：東京芸術劇場 発行日：2022(令和4)年11月10日
デザイン：阿部太一[TAICHI ABE DESIGN INC.]
印刷：有限会社 深雪印刷
禁無断掲載

東京
芸術
劇場

Tokyo
Metropolitan
Theatre